

## 「AのB」をどう表現するか

### —日本語の「AのB」構造が日本人英語学習者の前置詞選択に与える影響—

生田 裕二

千葉県立千葉南高等学校 〒260-0803 千葉県千葉市中央区花輪町 45-3

E-mail: y-ikuta@sb4.so-net.ne.jp

#### 概要

英作文において、「AのB」という表現を適切な前置詞を使って表現する苦勞は誰もが一度は経験するのではない。例えば「家族の写真」を"a picture of my family"と表現する一方、「人口の増加」は"increase in population"、「部屋の鍵」は"a key to the room"となるように、使用するべき前置詞はコロケーションによって異なり、これは日本人英語学習者だけでなく英語教師をも悩ませる問題のひとつである。そのような中で、学習者が習得しやすい前置詞とそうでないものが存在するのではないかという仮説のもとに本研究に着手した。

方法として、県内公立高校の2年生 38名、国立大学1年生 28名、私立大学1年生 29名を対象に「AのB」という表現を含む日本語文(16問)を空所補充形式で英訳させた(適切な前置詞を空所に補充)。さらに国内外の英語母語話者(36名)に対しても同じ英文を提示し解答してもらい使用傾向を調査、併せて彼らの各前置詞用法に関するコメント、さらには日本人学習者の前置詞使用に対する意見も検証した。

その結果、使用する前置詞の意味や context によって学習者の正答率は異なるが、概して「AのB」を正確に訳出できる度合いは高校生・大学生共に高くはないことがわかった。さらに、英語母語話者は、前置詞を学習者が英文を書く上での大きな障害の一つと考え、非母語話者による前置詞の誤用に対し必ずしも肯定的ではなく、accuracy を求める意見が予想以上に多いことも明らかになった。

キーワード 前置詞、「AのB」、accuracy

## Analysis of Learner's Use of English Prepositions That Can Be Translated to "A no B" in Japanese: Case Study of Early-Stage English Learners in Japan

Yuji Ikuta

Chiba Minami High School 45-3 Hanawa-cho, Chuo-ku, Chiba-shi, Chiba 260-0803 Japan

E-mail: y-ikuta@sb4.so-net.ne.jp

#### Abstract

English prepositional phrases used as postmodifiers, which are by far the most common type of postmodification used in all registers, have invariably been viewed as one of the quandary for a large number of Japanese EFL (English as a foreign language) learners. Further, generating prepositional phrases tantamount to a Japanese commonly-used expression "A no B" (e.g., "a picture *of* my family" for "*kazoku no shasin*" or "a rapid increase *in* population" for "*jinkou no kyuzou*") tortures not only students but also teachers, frequently leaving them clueless in selecting the most appropriate preposition for each context. This research highlights and explores the subject, based on the surveys conducted on 38 high school students and 57 university students at an intermediate to advanced level, which have revealed how prepositions are being utilized. The results obtained were examined thoroughly, with several plausible and potential backgrounds being analyzed. Abundant feedback from 36 native speakers of English (henceforth, NSs) also made it possible to explore this issue from another viewpoint. Completing a similar format of the survey, the participants provided various types of informative and astonishing responses. Verifying these prepositional uses bilaterally (from both native and non-native standpoints) rendered this study more cogent and objective, adding somewhat new dimensions to this issue.

**Keywords** prepositions, "A no B," accuracy

## 1. はじめに

ライティングにおいて日本人英語学習者（以下「学習者」）が最も苦勞すると考えられる項目のひとつは前置詞の適切な使用であろう。安藤(2012)は「英語の前置詞は複雑をきわめていて、外国人にはマスターしがたい」と述べており、石井(2008)は「前置詞については初級者から上級者までレベルを問わず英語学習者を困らせている」と主張する。その重要性に加え多くの機能や意味を持つ前置詞は、様々な文脈において学習者を悩ませていると推察できる。

この問題に苦勞しているのは学習者だけではなく、教師もまた前置詞用法に関する情報不足に困惑することが多い。とりわけ学習者による英作文の添削においては、前置詞に関する多くの知識を必要とする場合がしばしばである。前置詞は実に多様な形で使用されるので、各文脈において正確に使用されているか否か判断するのに困難を極めることも珍しくない。

特に教師と学習者が共に直面している難題のひとつは、日本語で頻繁に用いられる「AのB」という表現を英訳する際にどの前置詞を使用すべきか、というものである。実際のところそれは様々な前置詞を使って表現されることが多い。例えば「家族の写真」は一般的には“a picture of my family,”と訳される一方で、「人口の増加」は“increase in population”、「部屋の鍵」は“a key to the room”となる。どの前置詞を使用するかは、多くの場合コロケーションと各前置詞が持つ機能を基に決められる。当然のことながら、各文脈に適切な前置詞を選べるようになるには、豊富な経験と練習が必要となるが、多くの学習者がその条件を十分に満たしているとは言い難い。

本研究の目的のひとつは日本語の「AのB」という表現を学習者が英訳する際にどのような前置詞句を使用しているか、を調査することである。これに関する言語的研究の中でもピーターセン(2013)は「英語ではさまざまな前置詞を使い分けるのに対して日本では『の』の使用頻度が極めて高い」、「『の』の問題については妙案があれば知りたいものである」と述べている。多くの学習者が前置詞使用に苦勞する中、彼らがどの程度適切な前置詞句を作り出せるかは、関係する前置詞や表現内容によっても異なると予想される。

本研究はこのテーマに関する英語母語話者（以下NS）の視点も検証することにした。日本人英語学習者から得られた結果を考察するだけでは、この研究を客観的かつ説得力あるものにするには充分と言えず、NSからの回答が何らかの新しい洞察を与えてくれることが期待できると考えた。

文法的な間違いや単語の誤用にこだわりすぎず、数多く文章を書くことを奨励する今日のライティング教

育研究の傾向を鑑みた場合、このように前置詞用法に焦点を当てることは、些末あるいは時流に遅れたものと見なされる可能性もある。実際、Guest (2008)はwritingの学習においては「何を書くか」がしばしば「どのように書くか」より重要だと指摘した。

しかし、fluencyにより重点が置かれる中、この傾向が時に裏目に出てしまうようにも思える。accuracy重視がやや時代遅れと見なされることで、かえって学習者の作文力が低下している可能性がある。Horowitz (1986)を引用して Ferris and Hedgcock (2005)は、“With their emphasis on student writer’s ideas and individual writing processes, some instructors swung to the opposite extreme, giving little or no attention to the morphosyntactic or lexical accuracy of student’s products”と述べている。

さらにEFLライティングにおける必要不可欠な要素としてaccuracyの重要性を強調する向きもある。Grabe and Kaplan (1996)は、“In oral language, communicability counts, but in written text accuracy becomes important”と主張する。accuracyを構成する様々な要素がある中、「前置詞の正確な使用」がその1つであるのは間違いないだろう。Lindstromberg (2010)による以下の主張はこのことを強く裏付けるものである。“Even though prepositions—especially the most common ones—tend to be small (both in writing and sound), encountering an unusual collocation can be very jarring.”

さらに言及しておくべきこととして前置詞句の後置修飾の多用に注目する必要性があげられる。後置修飾には他にも関係詞節や現在分詞・過去分詞・不定詞によるものがある。(一例として、“people with dementia”は“people who suffer from dementia”や“people suffering from dementia”となり得る)しかしBiber, et al. (1999)はコーパス調査の結果、前置詞句がすべての使用域で群を抜いて最も使用頻度が高い後置修飾句である(65~80%)ことを示しており(図1参照)、このことから、本研究の実施がより意義あるものと考えられる。

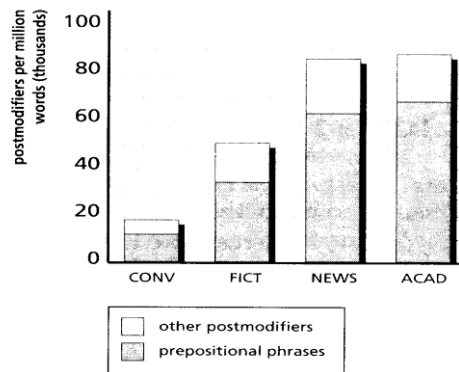


Figure 1: Prepositional v. other postmodification across registers

## 2. リサーチ・クエスチョン

本研究において、以下の3点をリサーチ・クエスチョンとして設定した。

1. 「A の B」という日本語表現を前置詞を使用して表現する際、学習者はどの程度正確に英訳できるのか。
2. 「A の B」を英訳する上で学習者にとって使いやすい前置詞とそうでない前置詞が存在するのか。
3. ライティングにおける学習者の前置詞誤用を NS は概してどう受け止めているか。

## 3 調査方法

本調査は高校生・大学生を対象とした前置詞のテスト(調査1)と NS を対象としたアンケート形式のもの(調査2)を使用した。

### 3.1 被験者

高校2年生38名、大学生57名、英語母語話者36名を対象に調査を実施した。高校に関しては、ある程度英語の文法力・読解力がある生徒の多い県内の公立高校を選択した。(その方がより彼らの前置詞使用に焦点をあてた調査ができると予想されたからである)。かつ当該高校から多くの生徒が進学する県内の国立大学(A大学)の学生(28名)も対象にすることで、高大間のギャップを必要以上に大きくすることを防ぎ、高校から大学にかけての学習者の前置詞知識の段階的成長も観察できるのではないかと考えた。

本研究に特に欠かせないものとして盛り込んだのは英語母語話者からの視点である。(インフォーマントの内訳はアメリカ人27名、イギリス人7名、カナダ人1名、ウガンダ人1名で、年齢層は18歳~72歳、うち初級~中級程度の日本語能力を有する者は20名であった。) NSからの回答を含めることによって、意外かつ新たな視点を得られ、より客観的かつ中立的なデータを背景にした洞察を加えるものにできると考えた。

### 3.2 Materials

#### 調査1

ここでの調査は学習者の前置詞に関する知識を問うもので、与えられた日本語文の意味を表すように提示された英文の空所に最も適当な前置詞を補充するものである。各日本語文には「A の B」という表現が含まれており、学習者はそれらをどのような前置詞句で英訳するか考えるようになっている。文法書や辞書等は参照させず、10分間で実施した。提示した文は以下の通りである。

1 「京都のおじさんの家に滞在した。」

I stayed with my uncle ( ) Kyoto.

2 「夏目漱石の小説を読んだことがありますか。」

Have you ever read any novels ( ) Soseki Natsume?

3 「彼らはみんな英語の先生が好きです。」

All of them are fond of the teacher ( ) English.

4 「私は生物の試験を受けなかった。」

I did not take the examination ( ) biology.

5 「彼は千葉大学の教授だ。」

He is a professor ( ) Chiba University.

6 「これが部屋の鍵です。」

Here is the key ( ) the room.

7 「これは風邪の薬です。」

This is medicine ( ) a cold.

8 「昨日友人の訪問があった。」

I had a visit ( ) my friend yesterday.

9 「あなたの成功の理由は何ですか。」

What is the reason ( ) your success?

10 「人口の急な増加があった。」

There has been a sharp increase ( ) population.

11 「日本の人口は韓国の人口より多い。」

The population ( ) Japan is larger  
than the population ( ) South Korea.

12 「大学時代の古いアドレス帳を見つけた。」

I found my old address book ( ) my college days.

13 「コンサートのチケットを手に入れた。」

I got a ticket ( ) the concert.

14 「認知症の老人を介護するのは簡単ではない。」

It's not easy to look after an elderly person ( )  
dementia.

15 「彼は子どもの頃の親友だ。」

He is my best friend ( ) when I was a child.

16 「去年の浴衣はもう小さくなってしまった。」

My yukata ( ) last year is short now.

勿論これらの文が前置詞を使ったあらゆる「A の B」の表現を網羅しているわけではないが、今回の研究では高等学校の英作文の授業で比較的よく出てくるもの、さらに学習者からその用法について質問を受けたものを中心に設問を考えた。

#### 調査2

これは NS を対象としたもので、調査1で扱った上記の設問の解答を選択式で選択してもらうものである。選択式にすることで、日本人学習者が使ってしまうが、または使っていないのか自信が持てない選択肢を含めることができ、その正誤の判定を NS の語感から明確にできると考えた。また選択肢以外に我々日本人英語学習者が正解と認識していない解答や彼ら自身のコメントもあり得ることから、それらも必要に応じて記入してもらった。NS の持つ前置詞使用に対する語感というものは把握しづらいものであり、本研究の意義は

この点にも見いだせるのではないかと考えた。また、先述の通り全ての被験者が日本語を理解できたわけではないが、各設問には日本文の対訳も載せた。

#### 4. 結果と考察

##### 4.1 調査 1 の結果

より包括的かつ詳細な分析を求めて、調査 1 の結果を以下のように 3 つのカテゴリーに分類した (分類基準は大学生と高校生の知識量の差も一部考慮に入れ、以下のように分けた)。

##### Group A:

「高校生・大学生共に正答率が比較的に高かったもの」  
(正答率: 高校生 40% 以上、大学生 50% 以上)

質問文	高校生	大学生
1. I stayed with my uncle <b>in</b> Kyoto	76.3%	96.4%
3. All of them are fond of the teacher <b>of</b> English.	42.1%	82.1%
7. This is medicine <b>for</b> a cold	52.6%	67.9%
10. There has been a sharp increase <b>in</b> population	42.1%	53.6%

表 1: Group A の結果

##### Group B:

「大学生は比較的高正答率だったが、高校生は低正答率だったもの」(高校生 40% 未満、大学生 50% 以上)

質問文	高校生	大学生
6. Here is the key <b>to</b> [for] the room.	21.1%	52.9%
9. What is the reason <b>for</b> your success?	31.6%	60.7%
11. The population <b>of</b> Japan is larger than the population <b>of</b> Korea.	39.5%	67.9%
13. I got a ticket <b>for</b> the concert.	10.5%	53.6%

表 2: Group B の結果

##### Group C:

「高校生・大学生共に正答率が低かったもの」  
(高校生・大学生共に 40% 未満)

質問文	高校生	大学生
4. I didn't take an examination <b>in</b> [for] biology.	28.9%	17.9%
5. He is a professor <b>at</b> [from] Chiba University.	26.3% [0%]	28.6% [0%]
8. I had a visit <b>from</b> my friend yesterday.	0%	7.1%
12. I found my old address book <b>from</b> [of] my college days.	0% [15.8%]	0% [7.1%]
14. It is not easy to look after an elderly person <b>with</b> dementia.	31.6%	35.7%
15. He is my best friend <b>from</b> when I was a child.	5.3%	21.4%
16. My yukata <b>from</b> last year is short now.	2.6%	14.3%

表 3: Group C の結果

さらに、今回得られたデータの補強として、同じ調査を別の大学 (B 大学) の 29 名の学生を対象に実施した。その結果は先述の大学 (A 大学) の学生の正答状況と多くの設問においてかなり類似しており (一部の設問においては正答率に 10% 以上の開きがあった。こ

れについては今後の研究でさらに解明していきたい)、今回の調査の有効性を高めると思われる。(図 2 参照)

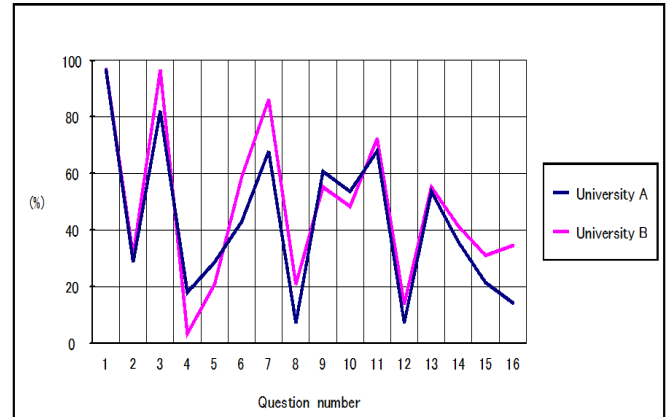


図 2: 2 大学の調査における正答率の比較

これまでのデータを基にした推論は以下の通りである。

- (1) 学習者が「A の B」という表現を前置詞句を用いて正確に表現できる度合いは、collocation によって異なり、全体的には必ずしも高いとは言えない。
- (2) 概して、英語への接触量が影響してか、高校生よりも大学生の方が今回の調査での正答率は高かった。
- (3) Group C には出所・起点を表す from を正解としたものが多く含まれており (表 3 において緑色に印字されている)、学習者にとってこのような from の用法は多くの場合において捉えにくいものではないか。

#### 4.2 「起点・出所」を表す "from" の用法

本研究では上記の調査結果のうち、多くの学習者がその使用に困難をきたしていると思われる「Group C に分類された前置詞」の用法に特に着目した。

Group C において特に注目すべきなのは、設問 5、12、15、16 の結果である。これらの設問に共通するのは、「A の B」という表現を英訳する際に「起点・出所」を表す from を使用しているという点である。設問 5 「彼は千葉大学の教授だ。」と設問 12 「大学時代の古いアドレス帳を見つけた」においては、from を解答できた被験者は高校生・大学生共に一人もいなかった。これらの用法は英語学習において、頻繁ではないにせよ、時々目にするものである。しかし、いざ空所補充の形式で英文を完成させるとなると、多くの被験者が使用できないという結果が今回の調査で明らかになった。実際に各設問において、被験者がどのような前置詞を使用したか表したものが以下のグラフである。誤答として様々な前置詞が使われており、この問題の奥深さを感じる。「A の B」という一見単純に思える日本語表現の英訳が実は予想以上に学習者には難しい課題なのだということが示唆されていると考える。

**Question5:**

He is a professor ( ) Chiba University.

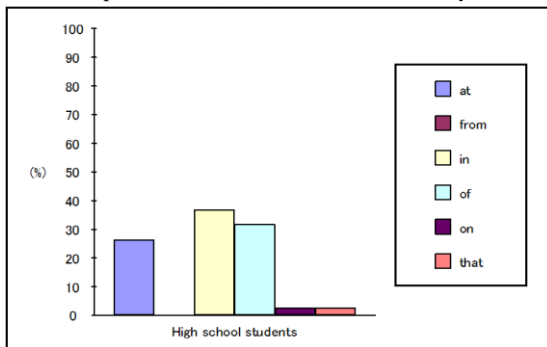


Figure 3.1: Results from H.S. students

**Question 15:**

He is my best friend ( ) when I was a child.

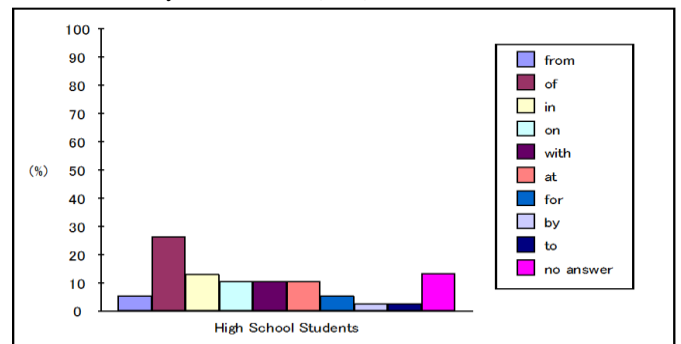


Figure 5.1: Results from H.S. students

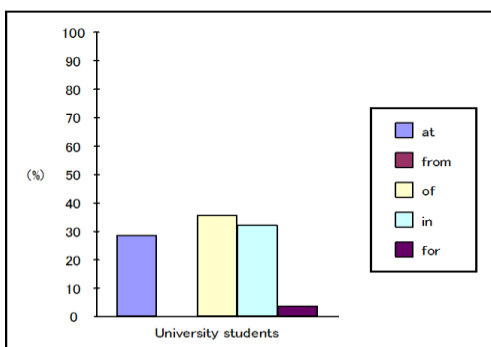


Figure 3.2: Results from Univ. students

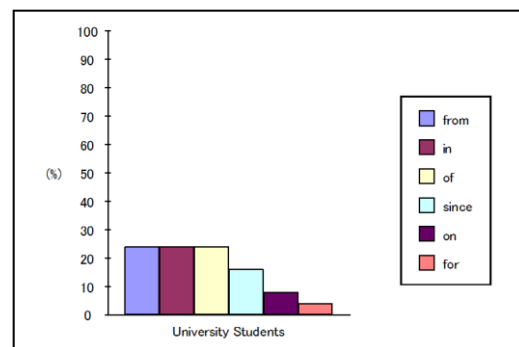


Figure 5.2: Results from Univ. students

**Question 12:**

I found my old address book ( ) my college days.

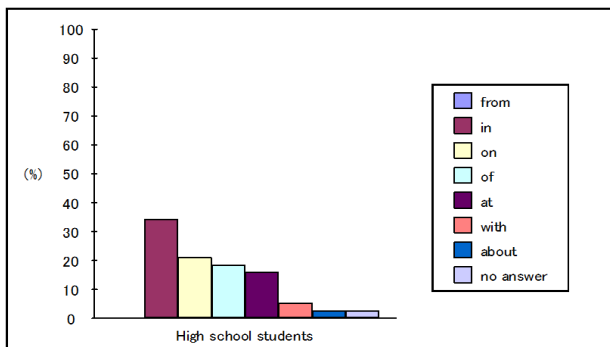


Figure4.1: Results from H.S. students

**Question 16:**

My yukata ( ) last year is short now.

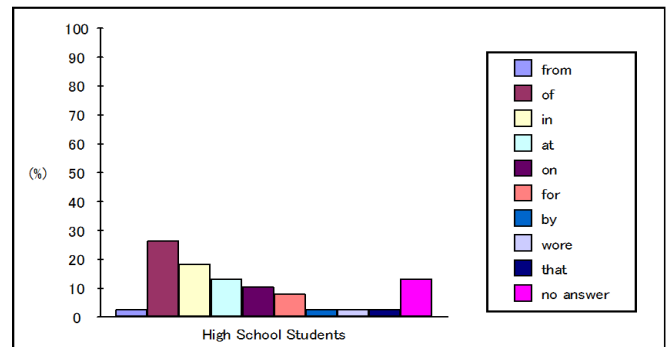


Figure 6.1: Results from H.S. students

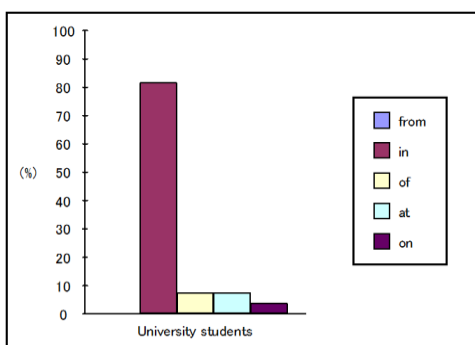


Figure 4.2: Results from Univ. students

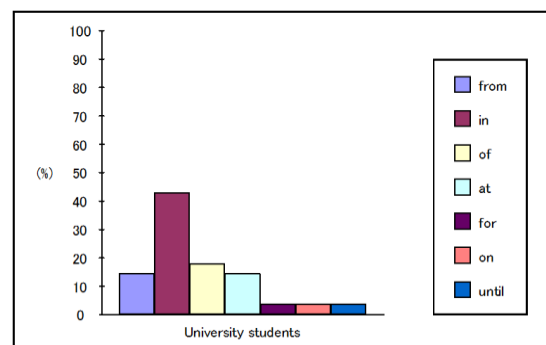


Figure 6.2: Results from Univ. students

さらに、この from の用法は学校のライティング教育等においてそれほど重点的・系統的に指導されているものとは考えられず、学習者がその使用に困難をきたす一因になっている可能性もある。しかし、別の見方をすれば学習者がこの用法を習得し、自らの active vocabulary として使いこなせるようになることで彼らの英語表現はこれまでよりも一歩洗練されたものになるはずである。一般的に学習者のライティング能力は急速に伸びると言うよりも、段階的に着実に向上していくものであると考えると、このような用法に焦点をあて、一層の研究を進めていくことが必要であると考えられる。

### 4.3 調査2の結果

先述の通り、本研究は日本人英語学習者の解答状況だけでなく、英語母語話者の視点に基づく前置詞使用状況も含めて考察していくことを目的とした。前置詞に対する捉え方をこのように両方向的に見て分析を進めていくことによって、本研究の信憑性と客観性をより高めることができるのではないかと考えた。

#### 4.3.1 英語母語話者の前置詞使用

学習者が解答した調査を NS のインフォーマントにも行い、必要に応じてコメントも記入してもらった。NS の解答は事前の予想とそれほど異ならないものもあったが、その一方で我々日本人英語学習者が学んだ知識とは一致しないものもあり、あらためて前置詞使用に関する捉え方を見直すことにもなった。

以下に示すのは、前出の設問 5、12、15、16 に関する NS の解答状況である。各設問において、一部の少数解答を除き、彼らは 1 つか多くても 2 つの前置詞の使用で解答が一致している。

#### Question 5:

He is a professor ( ) Chiba University.

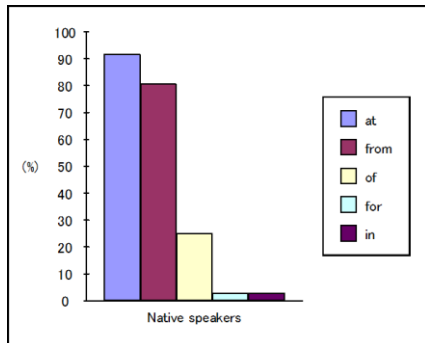


Figure 7: Results from NSs

#### Question 12:

I found my old address book ( ) my college days.

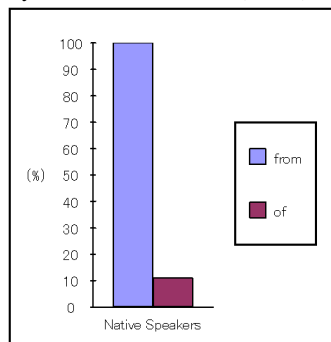


Figure 8: Results from NSs

#### Question 15:

He is my best friend ( ) when I was a child.

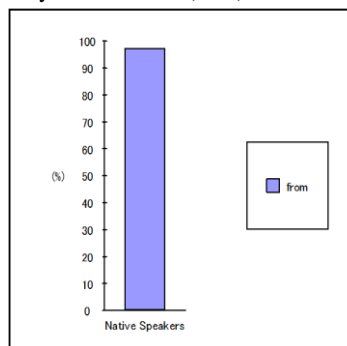


Figure 9: Results from NSs

#### Question 16:

My yukata ( ) last year is short now.

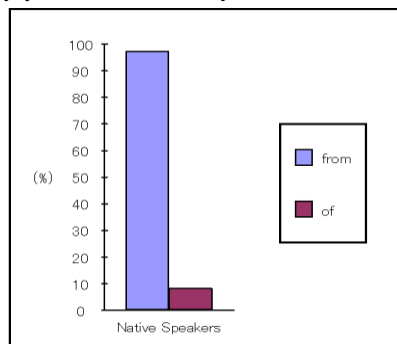


Figure 10: Results from NSs

#### 4.3.2 NS の視点によるライティングにおける品詞別に見た学習者の弱点

今回の調査においてはさらに、学習者がライティングにおいて問題を抱えていると思われる使用品詞が何であるか、NS のインフォーマントに回答してもらった。(選択肢として、名詞・動詞・助動詞・形容詞・副詞・前置詞・接続詞・関係詞・代名詞・その他を用意した。)

以下の表が示す通り、前置詞は学習者が直面する最も大きな壁であると、NS は見なしていることがわか

る。つまり NS の回答は、学習者による前置詞誤用の頻度の高さをあらためて示唆しており、本研究のテーマに焦点をあてる必要性をより強めたといえる。(ちなみに「その他」として NS に挙げられたものは冠詞、名詞の単複形であった。)

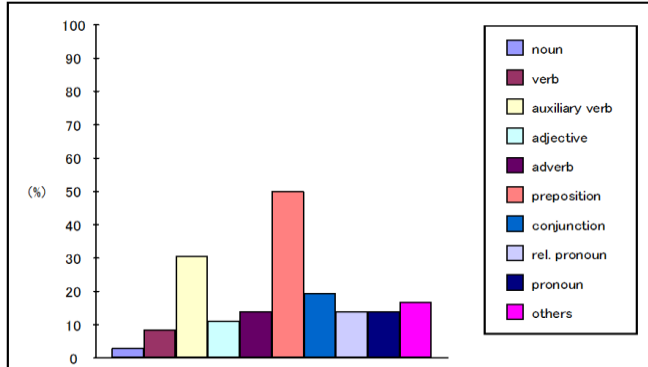


Figure 11: Where JLEs seem to have trouble in writing (by constituents / from NSs' viewpoints)

#### 4.4.2 日本人英語学習者の前置詞誤用に対する英語母語話者の見解

上記の調査はまた、学習者の前置詞誤用を NS がどう捉えているかも調べる目的で行われた。(質問内容: 「NS の中にはライティングでの学習者による前置詞の誤用を些細なものと考え、文意が伝わる限りそれらの間違いにはこだわる必要がない、と言う者もいる。これに関してあなたの意見はどうか」)

概して彼らは伝えるべき内容により重きを置いて、学習者の前置詞誤用に対しては寛容的な姿勢を示す傾向があるのではないかと事前に予想された。しかし、実際には予想以上に学習者の前置詞誤用への否定的な見解が得られたのである。つまり全ての NS が前置詞使用を些細なもの、あるいは非重要なものと思っていないわけではないことが示されたと考えられる。

調査対象となった 36 名の NS のうち、有効回答をしたのは 26 名であった。そのうち 13 名が学習者による前置詞誤用に肯定的な意見を述べ、残り 13 名が否定的な立場をとるとする是非が完全に二分される結果となった。(表 12 参照)

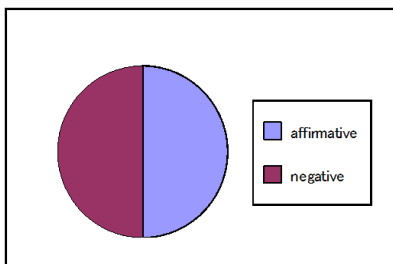


Figure 12: "Can Japanese EFL learners' prepositional errors be overlooked?"

各々の立場を代表するコメントは以下の通りである。

#### 英語母語話者による肯定的見解

"I agree—if the main idea is communicated, then a small error in preposition does not stop the communication, so it can be overlooked without losing a sense of respect."

(女性, 39 歳, アメリカ)

"I believe that the most important thing is to get the message across, so misuse of preposition isn't as important. By taking too much time on prepositions, I see many students get discouraged, and stop trying to work hard at English."

(女性, 22 歳, アメリカ)

#### 英語母語話者による否定的見解

"I think it is important to stress proper use of prepositions, as different prepositions sometimes change the meaning and context of the language."

(female, 24, USA)

"I believe that prepositions are a critical part of speech and English. They help identify locations and relationships between things. Often times, the lack of prepositions can cause a gap in understanding. Far from trivial, I would say that prepositions are quite necessary parts of English grammar."

(男性, 27 歳, アメリカ)

回答者の中には、一見すると中立的立場をとっているようで、前置詞の正確な使用の重要性を強調する者もいた。(以下の文の下線部を参照)

"The meaning can still be conveyed if the preposition is wrong, but the mistake can become annoying to native speakers and can undermine its message of the speaker."

(女性, 24 歳, イギリス)

"It depends on the context (formality, expectation of the other party). Basically, people tend to have a lower degree of tolerance for written errors than they do for spoken ones."

(男性, 年齢未記入, イギリス)

上記のコメントは、前置詞使用の正確性というものが、非英語母語話者にも求められている場合が多いことを示唆している。「A の B」を前置詞を使ってどう表現するか、という本研究のテーマを掘り下げていく意義はこのような点からも見いだせるのではないかと考えている。

## 5. 結論

### 5.1 リサーチ・クエスチョンに対する回答

#### 1. リサーチ・クエスチョン 1

調査 1 の結果から、「B の A」という日本語表現を前置詞句を用いて英訳することは多くの日本人英語学



習者にとっては難題で、超えるべき壁でもあるという結論に至った。同調査では of を必要以上に用いて“A of B”と表現する回答者は予想したほどは多くなかったが、それでも日本語に惑わされて of を使用してしまうケースも多く見られ、前置詞使用に関する学習者の知識不足があらためて浮き彫りになった。

## 2. リサーチ・クエスチョン 2

学習者がそれぞれの前置詞を正確に使用できた程度は様々であったが、特に彼らの多くが「出所・起点」を意味する from の使用に対して困難をきたしているということが示唆された。

## 3. リサーチ・クエスチョン 3

調査 2 において、学習者による多くの前置詞誤用に對する NS の認識が明らかになった。前出の表 11 が示すように、前置詞は接続詞や助動詞以上に学習者にとって正確な使用が難しいと考えられる項目である。

また、学習者による前置詞誤用に柔軟な姿勢を示す NS がいる一方で、ライティングにおける適切な前置詞使用の重要性を強調する NS は少なくない。調査 2 の結果が示すように、それぞれの設問文の空所を埋めるのに NS が選ぶ前置詞の数は、多くの場合限られており、選択肢が 1 つのみという設問もあった(設問 15)。同じ意味やニュアンスを持ち、交換可能な他の選択肢がある多くの動詞や形容詞、副詞と違って、前置詞はいくぶん厳密な規則に基づいたより固定的なものであり、交換可能な他の選択肢や例外的な使用がほとんどないということを、この調査が示唆している。

## 5.2 本研究の限界

まず、NS インフォーマントの日本語理解力にばらつきがあり、約半分が日本語の学習歴を持たないことが調査の結果に影響を与えた可能性がある(調査 2 では調査 1 と同じ条件で各設問を日本語と英語の両方で表示した)。また彼らの大半がアメリカ国籍であり、20 歳代の女性であったことも結果をいくぶん偏向的なものにした可能性がある。ある程度の日本語理解力を持つ、あるいは男性や年齢の高い世代の NS による回答がさらに多くあれば、本研究をより客観的かつ説得力に富むものにできたのではないかと考える。また、「A の B」という日本語表現が非常に広範囲にわたる文脈で用いられることから、それらすべてに相当する前置詞句表現を網羅することは不可能である。本研究では、高い頻度で使われる表現をなるべく含むよう、後置修飾の前置詞句から 16 の設問文を取り上げた。けれどもそれらが他のすべての「A の B」という用例に適用できるわけではない。前置詞使用は他の品詞同様、

個人や地域によって異なってくる可能性もあり、一般化するのには極めて難しい。しかしながら今後さらに多くの用例を用いてこのような研究を続けていくことで、今回の調査結果の信憑性をより高めていけると考えている。

## 5.3 教育的示唆

前置詞はその意味や用法が広範囲に及ぶものであり、学習者は様々な状況でどの語を使うべきか、悩むことが多い。今回の研究では、「A の B」を意味する前置詞を使った英語表現のうち、高校のライティング講座内で比較的頻繁に使用されるもの、また学習者が表現に迷うようなものを(全てのケースを網羅することは難しいという前提を認識したうえで)選び、学習者ならびに英語母語話者を対象としたテストの解答状況を分析してみた。その結果、高校生と大学生は多くの文脈において適切に前置詞を使いこなせていないことが明らかになった。同時に、いくつかの前置詞用法に対する被験者の正答率はとりわけ低く、「出所・起点」を意味する from はそのひとつである。

ライティング指導において、学習者の書いた文が語法・文法的かつ表現的に適切であるかどうかを判断するのに苦勞する場面は多い。また fluency と accuracy をバランスよく指導するうえで、前置詞という一見些末にも思える項目にどこまでこだわるべきかという問題もある。本研究が前置詞用法の指導において一隅を照らすものとなり、多くの指導者にとっての不明確な部分を少しでも整理する役割を担えたなら幸いである。

今後、前置詞用法に関してはより系統的かつ効果的な指導が望ましいと考えられる。NS の指摘を別の角度から考えれば、前置詞を今まで以上に使いこなせるようになることで学習者のライティングの質はこれまで以上に向上するであろうし、表現の幅もいっそう拡がると予想できる。

前置詞の効果的使用に向けて探求すべきことはまだまだ数多く存在する。徐々にではあるかもしれないが、さらなる研究が英語ライティング指導の前進に貢献できることを信じてやまない。

## References

- 安藤貞雄.(2012).『英語の前置詞』.東京: 開拓社.  
石井隆之.(2008).『前置詞完全マスタートレーニング』.東京: ベレ出版  
マーク・ピーターセン.(2013).『実践 日本人の英語』.東京: 岩波書店  
Biber, D., Johansson, S., Leech, G., Conrad, S., & Finegan, E. (1999). *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Pearson Education, 606.



- Ferris, D.R., & Hedgcock, J.(2005). *Teaching ESL composition: purpose, and practice*, Lawrence Erlbaum Associates, Publishers, 261-262.
- Grabe, W., & Kaplan, R.,B.(1996). *Theory and practice of writing: An applied linguistic perspective*. London: Pearson Education Limited.
- Guest, M.(2008). The language connection: Teachers should go easy on written mistakes, *Daily Yomiuri, July 22 issue*, 14.
- Horowitz,D.(1986).Process, not product: Less than meets the eye. *TESOL Quarterly*,20, 141-144
- Lindstromberg, S.(2010). *English Prepositions Explained*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, p.5, 44, 211.